

申請者:妹尾 大

論文題目 ナレッジ・エンジニアリングの戦略と集団プロセス:
ソフトウェア開発プロジェクト管理にみる状況的行為の解放

審査員 楠木 建
青島 矢一
佐久間昭光

この研究は製品開発プロジェクトにおける開発プロセスでの相互作用を状況的行為論の視点から考察した研究である。観察の対象として、ある企業の24のソフトウェア開発プロジェクトをとりあげ、プロジェクトリーダーに対するインタビューから得た定性的データによる分析と、若干の定量的分析が行われている。この研究は、近年のソフトウェア開発のプロセスが、いわゆる「ウォーターフォール型」という逐次的なプロセスを採用しなくなっているという減少に注目している。申請者は、「認知と行為が分けて結合している」という状況行為論の視点に立ってこの現象がなぜ起きたのかを考察する。そこでの主要な主張は、「ウォーターフォール型」開発モデルからの離脱は、マネジメントの事前期待にもとづいた戦略的選択ではなくて、むしろ従来切り離されていたリーダーの認知と行為が再結合され、リーダーが自らの状況的行為を解放しようとする結果である、というものである。

評価すべき点として、第1に、上で述べた状況的行為の立場からきわめてプロセス志向の、ダイナミックな組織分析を行ったという「視点の面白さ」があげられる。この視点でイノベーションの組織プロセスを分析することはきわめて可能性に満ちた研究方向であり、筆者の分析にも興味深い論点がちりばめられている。第2の評価できる点として、ソフトウェアの開発プロジェクトという調査対象もこれまで研究蓄積がそれほどない領域を取り上げたということが指摘できる。第3に、多くのプロジェクトに対する定性的な分析を行い、そこでのケース記述も豊かである。

ただし本研究にはいくつかの不完全な点がある。そのうち最大のものは、この研究が論旨の一貫性に欠けるということである。申請者は上で触れた状況的行為論と知識創造理論を結びつけようという意図をもっているものの、不完全な面がある。またソフトウェア開発プロセスの特徴を分析する次元を提示する部分や、定量的分析の一部分は、状況的行為論にもとづく本研究の中心的主張とうまくかみ合わないまま終わっている。しかしながら、上述したこの研究の視点の面白さと今後の研究の可能性を考えれば、このような問題点はむしろ挑戦すべき今後の課題として考えるべきである、と審査員は判断した。

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の著者が一橋大学学位規則4条第1項の規定に準じた取り扱いにより一橋大学博士(商学)の学位を受けるに値するものと判断する。